

二〇二三年一月発行
真宗研究第六十七輯抜刷

称名寺聖教を視座とした中世浄土教の再把握

——九品寺流相承に関する一試論——

佐 竹 真 城

称名寺聖教を視座とした中世浄土教の再把握

——九品寺流相承に関する一試論——

龍谷大学 佐 竹 真 城

問題の所在

神奈川県立金沢文庫で管理される国宝称名寺聖教には、およそ一五〇点の浄土教関連典籍が含まれており、なかには法然（一一三三—一二二二）とその門流に列なる人師の著作も散見される。これらは昭和のはじめに顕出されて以来、浄土宗・浄土真宗を中心に、宗学と関連の深い典籍から翻刻が進められているが、未翻刻の典籍も多い。本研究では、それら未翻刻典籍のうち、法然門下の覚明房長西（一一八四—一二六六、以下長西）を派祖とする九品寺流諸師の典籍を扱う。

九品寺流は諸行本願義とも呼ばれ、派祖である長西とその門流は、古来、背師異義と批判的に評されてきた。それに対して筆者は、称名寺聖教から顕出された長西著作（浄土疑芥）を通して長西教学を検討し、従来の見解は一部改められるべきであると指摘したことがある。では、なぜ長西は必要以上に異端視されたのだろうか。（浄土疑芥）を用いた検証のなかで、次のような理由が浮かび上がってきた。一点目は、長西教学の所伝の問題である。長

西の著作は、称名寺聖教から（浄土疑芥）等が顕出されるまで、その殆どが散逸していた。そのため、第三者の所伝、すなわち九品寺流と好敵手関係にあった鎮西義諸師による批判的言説等が、検証されることなく長西教学として伝わっていた。加えて、長西撰述が不確かな書が無批判に用いられ、長西教学として理解されていたというものである。二点目は、九品寺流相承の問題である。一点目とも関連するが、長西の門流には実際に背師異義の者がいたことから、九品寺流、そして派祖長西の教学も同様に見なされた可能性があるというものである。

本研究は、特に二点目の検討を目的とするものであるが、そこで看過できないのが長西の孫弟子にあたる性仙導空（？—一三三—？）以下、導空）である。なぜなら、導空は専修念仏教団に名を列ねながらも、法然の『選択本願念仏集』（以下、『選択集』と略称）を難敵明恵（一一七三—一二三二）の『摧邪論』に依拠しながら批判したと伝えられるからである。ただし導空は、称名寺聖教のなかに複数の著作を確認できながらも、今日までに公に翻刻が報告されたのはわずか一点のみで、研究も殆どされていないことから、未詳の点が多くある。

そこで小論では、まず諸史料から導空の事蹟を確認する。つぎに称名寺聖教のなか、導空のほか長西・道教（一一二八七）・空寂（？—一二四二—？）における『法事讃』註釈書の所説を比較検討しながら、特に導空の著述態度等の特徴を明らかにする。そして、これらの検討から見えてくる九品寺流という単純なカテゴリーが有する問題を指摘して、中世浄土教を再把握していくための一助としたい。

一 導空についての基礎的考察

まず、基本的情報として、導空の事蹟と著作を簡潔に確認しておく。

(一) 導空の事蹟

『法水分流記』(一三七八年成立)には、

九品寺義又号、諸行本願義、

長西

住、九品寺。生所、讃州西三谷。九歳上洛、十九出家。上人往生時二十九歳、其後西山門人也。葬絶。

阿弥陀⁽³⁾

空寂

道教

念空、弘安十、七八七 性仙

〔『東洋学研究』三〇・七〇頁―七三頁略抄⁽¹⁾〕

とあり、長西を派祖とする浄土宗九品寺流(諸行本願義)の系譜にその名を列ねる人師として知られている。また、

鎌倉浄光明寺「地藏菩薩石像銘」には、

(背、陰刻) 供養導師性仙長⁽²⁾

正和二年十一月⁽³⁾ 施主⁽⁴⁾ 覚 大工⁽⁵⁾ □ □

〔『鎌倉遺文』三三一・三七〇頁〕

とあり、浄光明寺の長老を務めたことも窺える。

如上、導空は当時の東国専修念仏教団の中心的人物とも目されるが、一方で『浄土伝灯総系譜』(一七二七年成立)以下『総系譜』と略称)には、次の如き目を疑う事蹟も伝えられている。

性仙

称名寺聖教を視座とした中世浄土教の再把握

字道空。住^ス浄光明寺^ニ。此人附^レ順高弁摧邪輪^ニ而難^ス選択集^一。

〔浄全〕一九・一一二頁

これによると、長西の門弟として専修念仏教団の一流に名を列ねているにも関わらず、その根本聖典とも言うべき法然の「選択集」を、あるうことか難敵明恵の「摧邪輪」に依拠しながら批判したというのである。この点から、導空に専修念仏教団の一流である九品寺流としての自覚・認識があつたのか、聊か疑問が残る。

(二) 導空の著作

導空には、公に刊行された著作は確認できないが、称名寺聖教のなかに以下の写本が確認できる。

- ① 「観經玄義分管見鈔」(卷二のみ現存 目録番号・九二一一)
- ② 「観經序分義管見鈔」(卷一・二が現存 目録番号・九二一二)
- ③ 「観經定善義管見鈔」(卷二のみ現存 目録番号・九二一八)
- ④ 「観經散善義管見鈔」(卷一―三が現存 目録番号・九二一四―一三、九二一五―一三)
- ⑤ 「般舟讚管見鈔」(二巻 目録番号・九二二三、九二一六―一三)
- ⑥ 「観念法門管見鈔」(二巻 目録番号・九二一七―一三)
- ⑦ 「法事讚下管見鈔」(上巻および下巻の冒頭のみ残存 目録番号・九二一九)
- ⑧ 「選択集述疑」(二巻 目録番号・九三一―一三) ※撰者は推定

このなか、前掲の「総系譜」の記述と相まって、⑧のみ「金沢文庫資料全書」四「浄土篇二」に翻刻され、一部研究が進んでいる。しかし、その他は未翻刻であり、全体として見れば決して研究が進んでいるとは言えない現状である。

(三) 導空に関する先行研究

前述の如く、導空研究は十分に進展していないが、現状で指摘される点を確認しておきたい。日置孝彦氏は、「称名寺と宋代浄土教―性仙の『觀経疏管見鈔』を中心として―」（一九七八年）と題する論攷において、前掲の著作①④を用い、左の如く論じている。

これ（宋代浄土教典籍引用回数一覧表）によってわかることは、元照二六文、延寿一〇文、戒度九文、択瑛四文、源清三文、用欽二文の順で、このうち、元照の引文が最も多い。上記の如く、性仙は宋代浄土教を受容するうち、元照の引文が全体の約半数を占めているので……元照の浄土教をはじめとして当時の宋代浄土教を積極的に受容していることがわかる。また称名寺においても宋代浄土教が盛んに研鑽されていたものと思われる。

〔金沢文庫研究〕二四―一／二・二七頁 ※傍線と（ ）内は筆者加筆

日置氏の論点を端的に纏めるならば、殊に元照をはじめとした宋代浄土教典籍の受容が目立つとの指摘といえる。その他に、まとまって導空に言及する研究は見られず、日置氏の論攷も導空という人師の全体像を明らかにするというよりも、文献研究に基本的な主眼が置かれている。そこで、つぎに史料に基づき、導空がどのような評価をされていたのかを窺いたい。

二 導空に対する評価とその背景

これより、導空に対する評価を概観する。

(一) 諸史料に見える導空の評価

信憑性の高い情報として挙げられるのが、元から来日し、導空と同時代に活躍した臨済僧清拙正澄（一二七四—一三三九）によるものである。その著『禪居集』所収の「浄光明性仙宗師行状跋」には、

有二無位真人。向去劫以前、来劫以後、七出八没、如撃石火。似閑電光、広説無辺。管見鈔疏等語、皆聖智淵深、非凡情可測。寿与虚空一斉等。迎之不見其首、随之不見其後。名之状之、其可_レ得耶。喚作_二浄光明毘尼性仙大宗師_一。

〔五山文学全集〕一・四九九頁—五〇〇頁

とあり、導空ならびにその著作に対して賛辞を送り、「浄光明毘尼性仙大宗師」と、律に因んだ呼称を用いている。また、同様に元から来日した臨済僧である竺僊梵僊（一二九二—一三四八）の『来禅椰子東渡語』には、

宗師諱導空。字性仙。猶_二海東律龍_一歟。

〔新仏全〕四八・四四二頁上

とあり、「律龍」の如く律に因んで称讃している。

如上、導空は非常に高い評価を受けていることが分かる。殊にこれらの評価が、①元から渡来してきた禅僧によるものである、②「海東の律龍」の如く持律に起因する、という点は注目に値する。

(二) 導空に対する評価の背景

つぎに、導空が前述の如く高く評価され、かつ持律の面に対しての讃辞がある背景を考えてみたい。浄光明寺第四世の高惠（一二八四—一三三八）が中心となり起請した「浄光明寺住持高惠等連署起請文」には、左の如く記されている。

不断光明真言并_二浄土宗等_一四宗興隆発願事

右、発願旨趣者、仏法者依_二王法_一弘、王法者依_二仏法_一治。依_レ斯_二至于_一尽_二未来際_一、勤_二行_一不断光明真言、

建^レ立^レ浄土^ニ稱^レ華嚴^ト眞言^ト律宗^ト四箇^ノ之^ヲ勸學院^ト、興^レ行^レ修學^ト、紹^レ繼^レ法命^ト、專^ラ奉^レ折^レ天下^ト泰平^ト国土^ト安寧^ト之^ヲ御願^ト。抑^ニ又^ヒ報^レ広^ク大^ニ無^レ辺^ノ師^ト德^ト、成^セ自^レ他^ノ法^ノ界^ヲ得^レ脱^ス一^ヲ矣。

一 彼^ノ光明^ト眞言^ト等^ヲ依^テ所^ト者^ヲ、以^テ導^ク空^ノ和^尚法^ノ流^ヲ傳^レ持^ル之^ノ地^ト、可^レ為^レ其^ノ所^ト者^ト也^ト矣。

一 為^ニ當^ニ寺^ノ軌^ノ則^ト、仏^ノ生^ニ會^ニ以下^ニ、恒^ト例^ト臨^ト時^ト、仏^ノ事^ノ法^ノ會^ト等^ヲ、皆^ク悉^ク可^レ為^レ論^ノ議^ト。長^ク日^ト初^ニ夜^ト一^ニ時^ト座^ニ禪^ト可^レ勤^ト行^ス之^ヲ矣。

一 宗^々勸^レ學院^者、一^年中^ニ二^百五^十日^ヲ談^義打^集、不^レ可^レ有^レ欠^ス怠^ス一^ヲ矣。

一 於^テ當^ニ寺^ノ惣^ノ住^ノ持^ノ職^ト者^ヲ、為^ス門^ノ徒^ノ評^ノ定^ト、不^レ論^セ親^ノ疎^ト、不^レ存^ニ私^ノ曲^ト、可^レ指^ス下^ニ定^ト興^ニ隆^ス仏^ノ法^ノ器^ノ量^ノ之^ノ仁^ト。不^レ可^レ私^ニ相^ニ傳^ス之^ヲ一^ヲ矣。

一 為^ニ彼^ノ興^ニ隆^ス料^ノ種^ノ子^ノ物^ヲ置^キ之^ヲ、同^ニ心^ニ合^ニ力^ノ之^ヲ、同^ニ法^ニ等^ニ抽^キ志^ヲ策^ヲ誠^ヲ、守^レ護^レ長^ク養^ス。若^シ自^レ若^シ他^ト、不^レ可^レ私^ニ用^ス、不^レ論^セ親^ノ疎^ト、不^レ可^レ讓^ス別^ノ人^ト一^ヲ矣。

以前^ノ条^々、誓^ノ約^ノ如^シレ^ス。止^ニ住^ニ學^ノ侶^ト、未^レ來^ノ遺^ノ弟^ト、固^ク守^レ此^ノ文^ト。然^ル猶^ホ或^ハ為^レ違^ノ乱^ト者^ノ出^テ來^リ、或^ハ及^ニ違^ノ乱^ト者^ノ出^テ來^リ、或^ハ及^ニ于^レ癡^ノ怠^ト之^ノ時^ト、訴^ニ公^ノ庭^ニ、達^ニ上^ノ聞^ニ、応^ニ罰^ス者^ノ罰^ト、応^ニ興^ス者^ノ興^ト。若^シ違^ニ犯^ス此^ノ旨^ト、漏^レ神^ノ明^ノ仏^ノ陀^ノ利^ノ益^ト、失^シ現^ニ當^ニ三^ノ世^ノ本^ノ望^ト、永^ク沈^ニ三^ノ塗^ニ終^ニ無^レ出^ク期^ト一^ヲ矣。仍^ホ同^ニ心^ニ發^ス願^ト如^シレ^ス件^ト。

正和三年十一月十四日

智庵和上高恵(花押)

於^テ後^ニ日^ト見^レ此^ノ隨^喜。余^ハ同^ニ心^ト。月^ノ航^ノ和^尚性^ノ仙^ト(花^ノ押)

「自^リ正和三甲寅^ニ至^ニ文明元己丑^ニ一百六十六年也。」

〔鎌倉遺文〕三三・七八頁―七九頁

これは、高恵が浄土(諸行本願義)・華嚴・眞言・律の四宗勸學院の建立を發願したものであるが、併せて導空の法流が伝持されている地を光明眞言の依所とすることも記され、後日これを見た導空が隨喜し、同心であることを

書き付けていることが窺える。この点より、導空は四宗兼学の立場であったと推察できる。また、小論の「(一) 導空の事蹟」(六五頁)所引の「地藏菩薩石像銘」には、湮滅しているものの「長老」と刻まれていることが知られる。この「長老」という呼称について、大塚紀弘博士は、

破戒が常態となっていた顕密仏教に対して、仏教改革運動を推し進めた禪、律さらに浄土の寺院では共通して長老の呼称が用いられたのである。そして、禪律仏教が中国仏教から取り入れた長老の呼称は、戒律護持の住持への敬称として広く受け入れられたと考えられる。 (『中世禪律仏教論』五八頁)

と述べている。すなわち、禪・律・浄土の寺院で「長老」の呼称が共通して用いられるようになるが、特に戒律護持の住持への敬称であったというのである。なるほど、導空当時の浄光明寺は、禪こそ含まれないものの浄土と律を含む四宗兼学の寺院である。その四宗兼学を随喜して同心とした導空に対して「長老」の呼称が用いられ、あるいは禅僧から持律の面に対して高い評価が与えられるのも頷ける。しかしながら、専修念仏教団の人師としては、それがやや方向性を異にしているように見受けられるのである。

なお、いわゆる「諸行本願義」と禅律仏教との関係を示唆するのが、吉田淳雄氏である。筆者も前述した点より同意見であり、今後、この方面からの考察が求められるのは間違いないだろう。

三 導空撰『法事讚下管見鈔』の著述態度における特徴と問題点

これまでに、導空が専修念仏教団に名を列ねながらも聖道門との関係が深く、殊に禅宗の人師から持律の面に対して高い評価を受けていることを確認した。ここからは、導空の著述態度の一端を、『法事讚下管見鈔』(以下、『管見鈔』と略称)から窺う。

(一) 「法事讚」下管見鈔」の書誌

まず、「管見鈔」の書誌について確認しておきたい。以下に現存部の書誌情報を纏めておく。

■「管見鈔」の書誌概略

現存部	上巻―下巻冒頭―題号釈―転経分第一〇段(「小経」東方段引文)の一部まで。
紙数	【上巻】六二丁 【下巻】一丁 ⁹⁾
体裁	【上巻】半葉六行、一行三二字内外 【下巻】半葉七行、一行一六字内外。
構成	はじめに「法事讚」本文の所釈箇所を「従●●至于●●」と示し、続けて「述曰」(一箇所だけ「述云」と所釈文に対する註釈を施す。三一の文段がある。

(二) 九品寺流四師における「法事讚」註釈書の比較と「管見鈔」の著述態度

続いて、導空が九品寺流の人師であるならば、同門の諸師と比較した際に何らかの教学的一致乃至著述姿勢的一致が見られることが想定される。そこで、①派祖長西の「法事讚疑芥」(以下、「疑芥」と略称)、②長西門弟にして導空の師とされる道教の「法事讚見聞集」(以下、「見聞集」と略称)、さらには③長西門弟の空寂の「法事讚要略記」(以下、「要略記」と略称)と、二、三の観点から比較してみたい。

(1) 九品寺流四師の『法事譜』註釈書に引用される典籍の比較
 まず、引用典籍ならびに引用回数を確認・比較してみよう。纏めると左の表の如くである。

■九品寺流四師の引用経論ならびに引用回数一覧表^②

經 論 名	「疑芥」	「見聞集」 ^①	「管見鈔」	「要略記」
「華嚴經」(般若訳)	2	1	1	1
「正法華經」	1	1	1	1
「法華經」	1	1	2	1
「涅槃經」	1	2	1	1
「大般若經」	1	1	1	1
「大乘經」?	1	1	1	1
「禪偈經」?	1	1	1	1
「大集經」	1	1	1	1
「首楞嚴經」	1	1	1	1
「正法念經」	1	1	1	1
「楞伽經」	1	1	1	1
「超世經」	1	1	1	1

「思益經」	1	1	1	1
「維摩經」	2	1	1	1
「無量壽經」	3	1	12	6
「觀無量壽經」	1	1	16	5
「阿弥陀經」	1	1	4	1
「大阿弥陀經」	1	1	1	1
「平等覺經」	1	1	1	1
「稱讚浄土經」	6	7	1	4
「隨願往生經」	1	1	1	1
「阿闍伽國經」	1	1	1	1
「浄土本縁經」	1	1	1	1
「十住断結經」	1	1	1	1
浄影「無量壽經義疏」	1	1	1	1

元照【阿弥陀経義疏】	仁岳【阿弥陀経新記】	慈恩【阿弥陀経通贊疏】	慈恩【阿弥陀経疏】	慈恩【阿弥陀経述讀】	玄一【阿弥陀経疏】	慈藏【阿弥陀経記】	慧浄【阿弥陀経義述】	僧肇【阿弥陀経疏】	懷感【釈浄土群疑論】	迦才【浄土論】	慈恩【西方要決】	天台【浄土十疑論】	天台【観無量寿経疏】	法聡【観無量寿経記】	龍興【観無量寿経記】	愷興【無量寿経連義述文贊】
26	4	14	24	3	25	3	1	33	3	1	1	1	1	1	1	1
8	1	1	4	1	6	1	1	9	1	2	1	1	1	1	1	1
17	1	6	1	1	3	1	1	7	1	1	1	1	1	1	1	1
6	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

【菩提心論】	訶梨跋摩【成実論】	【大智度論】	曇鸞【往生論註】	【浄土論】	【十住毘婆沙論】	持通【称讃浄土経疏】	水觀【阿弥陀経要記】	源信【阿弥陀経略記】	元曉【阿弥陀経疏】	円測【阿弥陀経疏】	天台【阿弥陀経義記】	智円【阿弥陀経西資鈔】	智円【阿弥陀経疏】	希深【阿弥陀経疏】	用欽【阿弥陀経超玄記】	戒度【阿弥陀経義疏開持記】
1	3	4	1	1	1	1	16	14	12	21	14	4	35	3	3	4
1	1	1	1	2	1	1	14	3	1	2	2	1	1	1	1	1
1	3	4	1	1	1	1	1	1	2	2	2	1	1	1	1	2
1	1	1	1	1	1	1	4	3	1	1	1	1	1	2	3	3

称名寺聖教を視座とした中世浄土教の再把握

世親「俱舍論」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
親光「仏地經論」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
普光「俱舍論記」	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
円暉「俱舍論頌疏」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
「成唯識論」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
「有部律」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
「四分律」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
道宣「四分律行事鈔」 ⁽¹⁾	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
元照「行事鈔資持記」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
道宣「釈迦方誌」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
「大乘起信論」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
義浄「南海寄帰内法伝」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
智顛「摩訶止観」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
湛然「止観輔行伝弘決」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
湛然「法華文句記」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
湛然「五百問論」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
吉蔵「金剛般若経疏」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

澄観「華嚴演義鈔」	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
宗密「孟蘭盆経疏」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
「秘蔵記」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
天台「菩薩戒義疏」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
玄奘「一切経音義」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
最澄「守護国界章」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
円仁「授決集」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
安然「教時諍」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
道綽「安楽集」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
善導「観無量寿経疏」	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
善導「般舟讚」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
善導「往生礼讃偈」	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
善導「観念法門」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
(善導「法事讃」)	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
法照「五会法事讃」	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
「浄土私記」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
法然「選択集」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

これらの引用典籍ならびに回数をも単純に比較すると、以下の点を看取できる。

はじめに、引用回数という観点で見れば、四師何れにおいても「元照疏」の引用割合が大きいことが分かる。また、空寂以外の三師で見た場合は僧肇「阿弥陀経疏」が、導空以外の三師で見た場合は永観「阿弥陀経要記」が、それぞれ高い割合で引用されていることが窺える。

つぎに、引用典籍の共通性という観点で見れば、左の如く整理できる。

まず、四師に共通する引用典籍として、「大智度論」・玄二「阿弥陀経疏」・元照「阿弥陀経義疏」(以下、「元照疏」と略称)・伝慈恩「阿弥陀経通贊疏」(以下、「通贊疏」と略称)・通贊「阿弥陀経疏」(以下、「慈恩疏」と略称)・天台「阿弥陀経義記」(以下、「義記」と略称)・源信「阿弥陀経略記」(以下、「略記」と略称)を挙げることができる。続いて、四師のうち三師に共通する引用典籍は左の如くである。

- A 長西・道教・導空に共通する引用典籍…6例
- B 長西・道教・空寂に共通する引用典籍…4例
- C 長西・導空・空寂に共通する引用典籍…6例
- D 道教・導空・空寂に共通する引用典籍…0例

そして、四師のうち二師のみに共通する引用典籍は左の如くである。

- a 長西・道教のみが共通して引用する典籍…10例
- b 長西・導空のみが共通して引用する典籍…3例
- c 長西・空寂のみが共通して引用する典籍…5例
- d 道教・導空のみが共通して引用する典籍…1例
- e 道教・空寂のみが共通して引用する典籍…0例

f 導空・空寂のみが共通して引用する典籍：1例

単純な比較ではあるが、これによって長西と道教の親和性が最も高く、また道教・導空・空寂は長西以外との親和性が低いことを見て取れる。しかしながら、何れの人師も長西と接することで、九品寺流という一流における共通性が形成されていると見ることができるともいえない。

なお、これら諸師の共通性・関係性を見る上で看過できないのが、『選択集』引用の有無である。『選択集』の用・不用ということについては、たとえば西山派の行観（二二四—二三二五）が著した『選択集秘抄』に、諸行本願の人師として木幡の真空（二二〇—二二六八）を挙げ、真空の所談として次のような逸話を紹介している。

九品寺覚明房云「諸行本願一誠以可然。行云ニ合。法門一言至程折節、談此選択一時見之云、覚明房聞^{クモ}「^{ナリト}学匠^{ルカト}」有^{フル}用^ニ此^ノ選択^事。言^{ヒテ}即^チ帰^{ラントスルニ}。覚明房云、只可^シ入^リ賜^フ。是^ハ会^ス釈^ト。有^ル云^フ。雖^モ会^ス釈^ト何^カ事^カ可^シレ^バ有^ル云^フ。誠^ニ以^テ諸^行本^願立^テ不^レ可^レ用^ニ此文^ヲ。」

〔浄全〕八・三六七頁上

すなわち、真空が長西の所立も諸行本願義であると聞き、直接会って法門を談合しようとするところ、長西は『選択集』を講じていたが、それを見た真空が『選択集』を用いるとはどういうことか」と難じて帰ろうとしたところ、長西は「会釈することが出来る」と答えたが、「何を会釈することがあろうか、諸行本願と義を立てるのならば『選択集』は用いないのだ」と批難して帰ってしまった、というものである。

ここに、同じ「諸行本願義」と呼ばれる両師の間に、大きな相異を見ることが出来る。つまり、一言に諸行本願義といっても、全く同一の教義ではなく、種々の系統があるということである。このことを踏まえると、『選択集』の用・不用ということは、諸行本願義と呼ばれる人師の系統を考える上で、一つの判断材料となり得るであろう。そして、すでに確認したように、導空と空寂は『選択集』を引用しておらず、殊に導空は『選択集』を引用しないどころか難じたとされる人師である。引用経論の差異は、このような諸行本願義の系統の相異という観点とも符合

してくるのではないだろうか。

(2) 九品寺流四師における「法事譜」註釈の諸相

次に、前掲四師の註釈を対照することで、共通点・相異点を窺つてみたい。

(※以下の表では、対照の便を考慮して句読点や訓点は省略し、適宜改行した)

①「四十九載度衆生」釈対照表

長西「疑芥」三	道教「見聞集」下	尊空「智見鈔」上	空寂「要略記」下
<p>釈迦如来<small>乃者</small>度衆生等事 疑云卅九年度生之義依□□ 卅成道義者大論説也 法聰觀經記云十九出家卅□□ □涅槃<small>文</small> ミタ經新疏云<small>上</small>初部教者旧 云此經是仏成□□五会讚云 成仏四十余九年彼國經行遊五 天<small>文</small> □□經云十九踰城捨國王位 三十成道教化衆生文 釈竹□□説相十九踰城三十 成道不説爾前故云我少<small>文</small> 菩提□□八年作嬰婉七年作 童子四年學子明十年受五□□ □三十五成道四十五年中教化</p>	<p>四十九載度衆生事 疑云四十九載度衆生之義依何 經論耶答文証未勘 但大論第二云我家已來已過五 十歲<small>此</small>此文意依三十成道七十 九入涅槃之義歟出家者出三界 家成道義也然依三十成道説稱 之五十年七十九已滿也然七十 九年二月半入滅時分少故除之 云四十九載歟。 國義<small>法</small>法聰觀經記云十九出 家三十成道年八十唱入涅槃<small>然</small> 第三十年与第八十年非滿數 年故約滿數年云四十九載歟 (乙二丁右一左)</p>	<p>従高棲至于供養 述曰釈迦如来成正覺四十九載 度衆生者下座述讚 智論第二云我家以來已過五 十歲<small>此</small>此文意依卅成道七十九 入滅之義歟七十九年二月半入 滅時分少故除之云四十九載歟 法聰觀經記云十九出家三十成 道年八十唱入涅槃已上然今第 三十年与第八十年非滿數年故 約滿數年云四十九載<small>然</small> (一三「一七」丁右)</p>	<p>言四十九載者依三十成仏義如 法聰記云十九出家三十成道年 八十唱入滅 (六丁右一左)</p>

称名寺聖教を視座とした中世浄土教の再把握

諸衆生^文

金剛般若疏云若依光讚如来十九出家三十成道^文

疏記二云若仏十九出家乃成廿四成道若卅成道乃成廿五出家不同見別不須和会^文

五百問論^{妙集} 仏生時節涅槃住処身相説法諸部不同乃由見別不須定判^文

大論三云我年始十九出家学仏道我成道已来已過五歳^文
教時浄土論云八月入胎二月入滅若加余年成八十二五以四月出生二月涅槃若取満年乃七十九若□□同是八十年^文

天台宗意十九出家卅成道八十涅槃也

(二丁左—二丁右)

これは、「法事讃」の「四十九載度衆生」を註釈している箇所と比較である。まず注目すべきは波線部である。すなわち、法聡『観経記』に根拠を求めていくのは四師に共通しており(道教のみ「或義」所引)、これは九品寺流の特徴と見ることができらるだろう。つぎに注目すべきなのが道教と導空の註釈で、単なる一致とはいえないほどに同文であることを見て取れる。また、この点に鑑みれば、道教が「或義」として引用するのは、導空の註釈であるとの見方も成立し得るだろう。それが首肯されるならば、従来いわれるような、師∥道教、弟子∥導空という師弟関係も再考しなければならないかと思うが、詳細な検討は今後の課題としたい。

②「無有衆苦」釈対照表

長西「疑芥」三	道教「見聞集」下	導空「管見鈔」上	空寂「要略記」下
无有衆苦 ^{乃苦} 故名極樂等事 疑云十方浄土同皆无苦安樂也 何中有極樂之称歟答浄土私記 云問十方浄土各々有如此微妙 樂何不名極樂耶答案此義有二	无有衆苦 ^{乃苦} 故名極樂事 疑云十方浄土同皆无苦安樂也 何中有極樂之称耶答浄土私記 卷上云問十方浄土各々有如此 微妙土何不名極樂耶答案此義	言何故名為極樂者徵問下句仏 答言无衆苦者総有八苦彼土衆 生由大善根蓮花化主故无生苦 常少不老故无老死四大調和故 无病若壽命无量現窮聖德无死	無衆苦者対頭婆令生折厭三 界六道総名苦果訪観此界一切 皆苦無一可樂火宅牢獄未足為 喻弥陀浄土境界殊妙□賢同会 聞法悟道壽命永劫不退菩提更

<p>種一十方淨土雖有快樂或賢聖受樂凡夫不樂或有男樂无女樂或有断或人樂不断或人不樂或有善□人樂惡業人不樂故不得樂名今極樂皆樂故名極樂歟二花嚴經疏云極樂有花藏世界中若依此義者花藏即是極樂々々即花藏々々之中无有諸苦故名極樂歟<small>文</small></p> <p>円云□論苦樂者五濁重故有衆受諸樂者同名也<small>文</small></p> <p>(六丁左) ※網掛けは報告済の筆者翻刻から修正)</p>	<p>有二種十方淨土雖有地樂或賢聖受樂凡夫不樂或有男樂无女樂或有断或人樂不断或人不樂或有善人樂惡人不樂故不得樂名今極樂皆樂故名極樂歟二花嚴疏云極樂有花藏世界中□依此義者花藏即是極樂々々即花藏々々之中无有諸苦故名極樂歟<small>比</small></p> <p>又衆苦本如何答元照義疏云三界六道惣名苦果於中復有人苦五苦三苦生老病死貧困愛別怨会求不得為八苦也殺盜姪妄飲酒五惡業並是苦因必招苦果名五苦也苦苦壞苦行苦名三苦也</p> <p>(乙四丁右)左</p>	<p>苦无愛著外无違害故无怨憎会苦微妙境界随心自在故无求得苦无地獄鬼畜刀杖殺縛等无五感陰苦彼土一切内外境界悉生六識深妙喜樂且約經文出其一二林池宮殿衆寶嚴淨微妙色光能生眼樂諸天妓樂鳥樹羅網種種音声能生耳樂妙香飯食宝衣經行如次能生鼻舌身樂宝地柔軟微風適悅飛行遊戲亦生身樂觸諸境界念佛法僧无量功德能生意樂如是樂相説不能尽心知</p> <p>(一一)「一七」丁右一 (一一)「二八」丁右</p>	<p>有余樂不能足此祇无諸善已為可樂其樂何窮故云極樂也</p> <p>(八丁右)左</p>
--	---	---	---

これは、「法事讚」における「阿弥陀經」引文のなか、「無有衆苦」を註釈している箇所と比較である。長西と道教は、文言も含めて、問いの内容と「浄土私記」を引用して答えに代える構成まで全く一致していることが分かる。一方で、導空と空寂はそれぞれに註釈を施しており、長西や道教との関連は見られない。

③「我見(是利)」釈对照表

<p>長西「疑芥」三</p> <p>我見是利故説此言等事</p>	<p>道教「見聞集」下</p> <p>我見是利事</p>	<p>導空「管見鈔」上</p> <p>經舍利弗我見是利故等已下勸</p>	<p>空寂「要略記」下</p> <p>我見是利<small>釋</small>聞持記云即指行</p>
----------------------------------	------------------------------	--------------------------------------	--

称名寺聖教を視座とした中世浄土教の再把握

疑云我見者为知見为眼見歟答
知見也称讚經說觀也

肇云謂我法眼見是勝利勸汝
修往果也

慈恩云我了々々有如是勝利
故勸汝往生也文

又我見等之言者指上何文等歟
答上依正二報發願起行等也

称讚經云又舍利子我觀如是利
益安樂大事因緣說誠諦語若有

淨信諸善男子或善女人得聞如是无量壽仏不可思議功德名号極樂世界浄仏土者一切皆應信受發願如說修行生彼仏土文

又利者何等歟答利益也

天台記云心当發願一心修行願行相扶必得往生文

諸師多釈上來依正二報功德利益行者故也

因云舍利弗下三結意我見是利故說此言者謂見彼世界極樂壽命无量二報莊嚴之利也遂勸衆生發願生彼故云故說此言

信云引証勸成衆雖信解前說心有少猶預極樂功德不可言宣唯大聖境恐非我分且願且恐故以証勸此有五文一以自証知見勸二引他方

又說勸……此是初也意云我以仏眼觀明見此勝利故說彼因果汝等勿有疑文

又云問有人謂云於諸浄土極樂為下何故專勸彼土因果答云知其一未知其二於賢劫中唯除釈迦余仏国土皆名浄土彼是尊時既有男女
便利鳥獸豈勝極樂又下八万无央數浄土莊嚴妙事皆攝在極樂豈各別土為勝總攝處為劣耶文

疑云我見者为知見为眼見答
故肇公義疏云謂我法眼見是勝
利勸汝勤修往生也文

國義云知見也故称讚浄土經云
我觀如是利養安樂大事因緣文

又利者何等耶答天台義記云願
行相扶必得往生文

是我見是利之釈也
甲五丁右一左

往生我見是利見是殊常勝利益
故勸生彼國
五五「五九」丁右

法中專持名臨終感聖正念往生
之文
又略記云我以仏眼觀明見此勝
利故說彼因果汝等勿有疑
三三丁左一二四丁右

法中專持名臨終感聖正念往生
之文
又略記云我以仏眼觀明見此勝
利故說彼因果汝等勿有疑
三三丁左一二四丁右

法中專持名臨終感聖正念往生
之文
又略記云我以仏眼觀明見此勝
利故說彼因果汝等勿有疑
三三丁左一二四丁右

法中專持名臨終感聖正念往生
之文
又略記云我以仏眼觀明見此勝
利故說彼因果汝等勿有疑
三三丁左一二四丁右

法中專持名臨終感聖正念往生
之文
又略記云我以仏眼觀明見此勝
利故說彼因果汝等勿有疑
三三丁左一二四丁右

法中專持名臨終感聖正念往生
之文
又略記云我以仏眼觀明見此勝
利故說彼因果汝等勿有疑
三三丁左一二四丁右

法中專持名臨終感聖正念往生
之文
又略記云我以仏眼觀明見此勝
利故說彼因果汝等勿有疑
三三丁左一二四丁右

法中專持名臨終感聖正念往生
之文
又略記云我以仏眼觀明見此勝
利故說彼因果汝等勿有疑
三三丁左一二四丁右

法中專持名臨終感聖正念往生
之文
又略記云我以仏眼觀明見此勝
利故說彼因果汝等勿有疑
三三丁左一二四丁右

法中專持名臨終感聖正念往生
之文
又略記云我以仏眼觀明見此勝
利故說彼因果汝等勿有疑
三三丁左一二四丁右

法中專持名臨終感聖正念往生
之文
又略記云我以仏眼觀明見此勝
利故說彼因果汝等勿有疑
三三丁左一二四丁右

法中專持名臨終感聖正念往生
之文
又略記云我以仏眼觀明見此勝
利故說彼因果汝等勿有疑
三三丁左一二四丁右

これは、「法事讚」における「阿弥陀経」引文のなか、「我見」、もしくは直後の「是利」も含めた註釈箇所と比較である。長西と道教は、文言を含めて問いの内容が一致していることは注目される。答えに目を向けると、長西は明確に「知見」と述べた後、「眼見」の立場を取る。「僧肇疏」を引用して異説を紹介している。一方で道教は、

湮滅により確認することは叶わない。しかし、長西同様、続けて『僧肇疏』の「眼見」説を引用し、さらに「或義」として「知見」説を挙げている点に鑑みれば、「眼見」説を取っているものと推察する。そして、この「或義」が、長西説と説示・構造がよく似ていることに気づくから、あるいは長西説を指しているのかもしれない。導空は一見すると自説を述べているように見えるが、実はここに問題を孕んでいるため、次節で改めて言及したい。空寂は「是利」を『阿弥陀経義疏聞持記』で、「我見」を『略記』で解説したものと理解できる。何れにしても、長西・道教の近似性に比べると、やや立場を異にするのが導空・空寂であるとの見方ができるだろう。

④ 六方仏釈対照表

長西「疑芥」四	道教「見聞集」下	導空「管見鈔」上	空寂「要略記」下
<p>疑云已下六方仏者為限穢土仏 為通淨土仏歟答穢土為本可通 也</p> <p>恵心略記云称讚十方皆云淨土_文 永観要記云称讚經云住在各方 自仏淨土_文</p> <p>ア闍仏経云名无噴恚在東方阿 比羅提国_文 通讚云此云无動_文 元暁云不動_文</p> <p>(二丁右)</p>	<p>疑云已下六方仏為限穢土為通 淨土答穢土為本可通淨土歟但 諸師解釈非一準</p> <p>故源信略記云称讚經十方皆言 淨土_正</p> <p>又永観要記云各於其国者第四 明国土称讚經云住在各方自仏 淨土_正</p> <p>又玄一記云然此能讚无量寿仏 応是穢土已上此師存余仏皆穢 土之義故釈能讚无量寿仏亦穢 土仏義歟</p> <p>(甲六丁左―七丁右)</p>	<p>— (※散逸部?)</p>	<p>—</p>

これは、『法事讚』における『阿弥陀経』引文のなか、六方諸仏を註釈する箇所の比較である。長西と道教は、問い・答えともに文言がほぼ一致していることを見て取れ、その上で道教は議論を深めているようにも見える。一方で、導空・空寂には当該箇所の註釈を確認できない。

如上、それぞれの註釈を比較してみると、全体としては共通する点も見られなくはないが、大きな一致と言えるほどのものは確認できなかった。ただし、長西・道教の二師だけは、問答の立て方や、回答に引用する経論にも共通性を見出すことができる。さらに、答えにおいて「○○歟」とする、いわば決し難いけれども一応の回答として示すような文体的特徴は、長西著作中にしばしば見られるものであるから、両師の間には一定の関係があると見るのが穏当だろう。しかし、長西と導空・空寂の二師の関係については、一線を画しているように見受けられる。¹⁸⁾

(3) 『管見鈔』における問題点

これまで見てきたように、導空の『管見鈔』は、九品寺流諸師の著作と比較した際に共通する点を有するものの、派祖である長西とは系統をやや異にするものと窺える。筆者はその背景として、『管見鈔』の著述態度の特徴が影響していると推察する。その特徴とは、『元照疏』と『通贊疏』に多分に依拠して論述する点である。すなわち、『管見鈔』が所釈の文に対して「述曰」と註釈を施していく構成であることは前述の如くであるが、そのように説示することで自説のように見せておきながら、内実は前掲二書の文言を用いていることが明らかとなったのである。¹⁹⁾以下にその一例を挙げてみよう。

■特に顕著な例の対照表①

〔管見鈔〕上

〔元照疏〕

従高接至于莊嚴

〔管見鈔〕上

〔元照疏〕

廻曰又舍利弗等者文有三一天二金地三天花初常作天樂者準觀經作樂有三水觀中云百億花幢無量樂器以為莊嚴八種清風鼓此樂器等又樓觀云其樓閣中有無量諸天作天伎樂又有樂器懸處虛空不鼓自鳴等準下經云風吹樹網如百千種樂故知彼土天樂非一二黃金為地者準觀經彼國皆琉璃地以黃金繩雜廁間錯兼以七宝界其分齊今言黃金乃地面莊嚴耳三天花又三初六時雨花其土下二盛花供養即以下三供已還國中彼國光明常照既无日月則無晝夜順此方機且言六時準壽經中彼以蓮開鳥鳴為曉連合鳥棲為夜曼陀羅此翻適意言其美也又翻白花取其色其色也二中其土衆生通目九品衣被者其諦云外國盛華器也

天台義記云衣被者是盛花器形如函蓋而有一足手擎供養

三中食時謂中前也壽經云彼國宮殿衣服飲食猶第六天自然之物若欲食時七宝應器自然在前百味飲食自然盈滿雖有此食実无食者但見色聞香自然飽足事已化去時至復現等寄婦伝云五天道俗多作經行直去直來唯違一路如織之經故曰經行四分律經行有五益一堪遠行二能思惟三少病四消食五得定久住結示同前

(二四丁右—二五丁左)

第二莊嚴二初列相舍利下二結示初中有三一天樂二金地三天華初常作天樂者準觀經作樂有三水觀中云百億華幢無量樂器以為莊嚴八種清風鼓此樂器等又樓觀云其樓閣中有無量諸天作天伎樂又有樂器懸處虛空不鼓自鳴等準下經云風吹樹網如百千種樂故知彼土天樂非一二黃金為地者準觀經彼國皆琉璃地以黃金繩雜廁間錯兼以七宝界其分齊今言黃金乃地面莊嚴耳三天華又三初六時雨華其土下二盛華供養即以下三供已還國中彼國光明常照既无日月則無晝夜順此方機且言六時準大本中彼以蓮開鳥鳴為曉連合鳥棲為夜曼陀羅此翻適意言其美也又翻白華取其色也二中其土衆生通目九品衣被其諦云外國盛華器也纔生彼國即獲六通日往他方為開法故觀經云心時即能飛行遍至十方歷事諸仏又遊歷十方供養諸仏於諸仏前聞甚深法等十萬億者趣舉大數

(二六正藏—三七・三六頁上—中)

ここでは、『管見鈔』は「述曰」と自身の言葉で述べているように見えるが、対照してみれば一目瞭然、『元照疏』の文を用いていることが分かる。元照が『無量壽經』を「大本」とするのを、導空は「壽經」と言い換えていることや、導空は「衣被」について『義記』を引用して少しばかり詳説する一方で、『元照疏』の一節を省略するといふ相異は見られるが、その他は限りなく同文といえる。

■特に顕著な例の対照表②

〔管見鈔〕上)

從高至于彼國

〔通云〕經又舍利弗極樂國土衆生者皆是阿鞞跋致者新舊二徒因行有異文分為二初新生不退衆二補處位高衆此初也阿鞞跋致或云阿惟越致是梵語此云不退転不退有五一信不退二位不退三証不退四行不退五煩惱不退不被煩惱不退転故問生居淨土何故不退答無五退緣故一無病苦纏故二無違行故三常誦經法四常營善五長和順無諸違諍事所以不退此界人多反此応知又有欲境所牽多諸退屈也

〔靈芝疏〕云衆生者通九品収今師解釈云九品

俱迴得不退六三

經其中多有一生補處其數甚多非是算數所能知之但可以無量无边阿僧祇劫說補處但高衆一生補處者補闕處者此等菩薩因緣十地劫滿三祇尽此一生便成正覺故云一生補處也余經文易見故只如弥勒現居天界当來果成一生補大覺之尊三會度无边之衆即此類故无量壽經云設我得仏他方仏土諸菩薩衆來生我國究竟名到一生補處以本願力故彼生即入補處之位

言舍利弗衆生聞者通指末代聞上所説勸令發願願必引行行必感果所以以下伸意

〔通贊疏〕中)

經曰又舍利弗極樂國土衆生者皆是阿鞞跋致 贊曰第二新舊二徒因行有異文分為二初新生不退衆二補處位高衆此初也阿鞞跋致或云阿惟越致是梵語此云不退転不退有五一信不退二位不退三証不退四行不退五煩惱不退不被煩惱不退転故問生居淨土何故不退答無五退緣故一無病苦纏故二無違行故三常誦經法四常營善事五長和順無諸違諍事所以不退此界人多退反此応知又有欲境所牽多諸退屈也

經曰其中多有一處補處其數甚多非是算數所能知之但可以無量无边阿僧祇劫說 贊曰第二補處位高衆一生補處者補者補闕處者此等菩薩因十地劫滿三祇尽此一生便成正覺故云一生補處也余經文易見故只如弥勒現居天界当來果成一生補大覺之尊三會度無量之衆即是此類故無量壽經云設我得仏他方國土諸菩薩衆來生我國究竟各到一生補處以本願力故生彼即入補處之位

〔大正藏〕三七・三四二頁下—三四三頁上

〔元照疏〕

二結勸中初正勸衆生聞者通指末代聞上所説勸令發願願必引行行必感果所以以下伸意

〔大正藏〕三七・三六一頁中

諸上善人者過現益物謂之善人即前声聞不退及補処等菩薩也

〔靈芝疏〕初中如來欲明持名功勝先貶余善為少善根所謂布施持戒立寺造像礼誦坐禪懺念苦行一切福業若无正信廻向願求皆為少善非往生因註

〔解〕是无善提心諸善積少善根也今師下釈云人天少善斯謂也故智論云若世間中諸衆生業因緣故如修遠福德緣故生天上雜業因緣故人中已上无善提心善根是雜業也雜善也雜行也發菩提心善提是大善也正行也正業也也應知
(四三丁右—四五丁右)

(「通贊疏」中)

諸上善人俱会一处 贊曰第四勸生利益諸上善人者善者過現益物謂之善人即前声聞不退及補処等菩薩也俱在西方一会処也同師進業必假良緣朋家作仇事資惡党孟母移居於勝処宣尼不飲於盜泉蓋恥惡而慕善也慕善則芳蘭襲慶朋惡則鮑肆革風也勸生西方親之勝侶也
(「大正藏」三七・三四三頁上)

ここでも、『管見鈔』は「述」云と自身の言葉で解釈しているように見えるが、対照してみれば一目瞭然、前半部は『通贊疏』、途中に『元照疏』、そして後半は再び『通贊疏』の文を用いており、何れもほぼ同文であることを見て取れる。そして、同一文段には「靈芝疏云」と明記した上で『元照疏』から引用する箇所も見られることから、導空は意図的に出拠を伏せて用いていると推察できる。註

このように、導空は自説に見せて内実は『元照疏』ならびに『通贊疏』の説示を用いて論述しており、それは全三一の文段のうち、約四分の一にあたる八の文段・計一四回(『元照疏』九回、『通贊疏』五回)にわたる。また、実は空寂も同様に『元照疏』などを自説の如く用いていることが明らかとなってきた。紙数の都合から小論で言及することは叶わないが、稿を改めて検討したい。註

如上、九品寺流諸師の『法事讚』註釈書を比較すると、引用典籍の傾向および註釈態度の相異などを看取できる。そのなかで、長西と道教・導空・空寂の三師はそれぞれに共通項を見出せるが、とりわけ長西と道教は近似性が高く、それに比すると長西と導空は近似性が薄れていく傾向を見て取れる。このように、長西を媒介とすることで九

品寺流という一応のカテゴリイズは可能である。しかし、その一方で、長西と導空・空寂の二師には隔たりがあるのもまた事実である。また、導空・空寂は『選択集』を用いず、『元照疏』や『通贊疏』を用いて自説に置き換える部分が多く見られるなど、その著述態度は明らかに長西・道教と異なることが窺えるのである。

小結および今後の課題

最後に、小論で論じたことを端的に纏めて結びとしたい。

九品寺流という「カテゴリー」で見ようとする場合、長西を媒介とすることで一定の共通性を見出すことは可能である。ただし、長西↓道教↓導空といったような「相承」を見ていくことができるのかは、更なる検討を要する。それは、道教が「或義云」と示す説示に、長西・導空と一致する点がある如くである。また、長西・道教の著述態度の一致度合と、長西・導空、長西・空寂の著述態度の一致度合とは、やや開きがあるといわざるを得ない。特に小論では導空を対象として検討してきたが、『選択集』を引用しないことに加え、『元照疏』や『通贊疏』の説示を自説に置き換えて論じる著述態度を見る限り、スタンスそのものが異なるのだろう。²²そして、そのスタンスの背景には、著述態度や浄光明寺での事蹟、さらに禅宗における評価や持律の面に対しての讃辞という点に鑑みて、禅律仏教の影響があると推察する。²³

如上、称名寺聖教を視座として九品寺流の相承を眺めると、今日まで当然の如く語られてきた点に再検討の余地が生じてくるのである。すなわち、今回の考察において、導空は長西との共通性が皆無ではないが、長西の孫弟子との位置付けが妥当であるのか疑問が生じた如くである。よって、九品寺流という横の繋がり（≡カテゴリー）はともかく、縦の流れ（≡相承）という観点で見ると、より厳密な考証を俟たなければならぬだろう。そのた

めには、九品寺流諸師の現存典籍を翻刻し、「法事讚」註釈書だけにとどまらず全体を通して検討の必要がある。幸いにも称名寺聖教には多くの典籍が伝存しているから、引き続き未翻刻典籍の翻刻を進めつつ新たな視座を構築し、改めて九品寺流、ひいては中世浄土教全体を再把握していくことが課題である。

註(1) 筆者は、長西撰述の『往生礼讚光明抄』『観経疏光明抄』『法事讚疑芥』『群疑論疑芥』『浄土論注要文抄』を総称した表記として、『浄土疑芥』を用いる。

(2) 「長西の『諸行本願義』考―『浄土疑芥』を通しての再検討―」(『宗学院論集』八八、二〇一六年)

(3) 当該箇所は、底本の一六七八年書写本では「阿弥陀」とあるが、諸本・諸史料により「阿弥陀」と校訂した。

(4) 【引文凡例】①旧字は新字に、異体字は通行体に、それぞれ改めた。②系図の点線は、筆者により省略していることを示す。③原文には、筆者の訓みにしたがって訓点および句読点を付した。④強調したい箇所などには、適宜傍線処理等を施した。

(5) 井上慶淳氏も、九品寺流諸師間での「十念」や「少善根」「随縁雑善」理解の相異から、「そもそも彼ら自身に九品寺流という一門流としての意識があったのか、という点も改めて検討される必要があるように思われる」と問題提起している。(佐竹真城・赤松信映・西村慶哉・井上慶淳「共同研究」称名寺聖教『法事讚光明抄』について(三)―「少善根」「随縁雑善」理解に対する一考察と巻三翻刻―『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』二二・一五頁、二〇二一年)

(6) 時代は下るが、一七〇二年に刊行された『竺僧和尚語録』にも、『禅居集』に基づいて

禅居集賛^ニ性仙道空律師^一。

一片心源若^レ湛淵^一。袈裟日夜不^レ離^レ肩^ヲ。観経^ハ已^ニ入^リ東^ノ奥^ニ去^キ。管鈔^ハ同^シ将^リ浙^ノ水^ニ伝^フ。大覚網疎遺^ニ跳竈^ヲ、終南流遠^ニ著^ス年^ヲ。浄光明寺山頭月、長照^ニ寥寥^ニ永^ニ夜^ニ禅^ヲ。

(『大正蔵』八〇・四〇四頁上)

と讚えている記述が見られる。

(7) 『鎌倉遺文』には、「本文書、第一紙と第二紙の紙継目の裏花押は、切り取られ、第二紙と第三紙の紙継目裏に月

航性仙の花押がある」との註記がある。

- (8) 「諸行本願義」の性格と位置付け(『仏教文化研究』六五、二〇二一年)を参照。
 (9) 紙数について、『称名寺聖教目録』(一・一〇四頁)では上巻・五四丁・下巻・六丁とあるが、マイクロフィルムでは上巻・五七丁・下巻・五丁に整理されていて一定ではない。原本の確認を要するが、現状はマイクロフィルムの紙数が正しいと見るほかない。そして今回、上巻で一部本文がつかず、脱丁のあることが判明し、下巻として伝存する断簡五紙のうち四紙が現状の二丁へ繋がるということが確認できた。これにより、現存部は上巻・六二丁・下巻・一丁ということになる。しかしながら、それでもなお一丁目とは文脈が合わないため、さらに脱丁のあることが推察できる。脱丁は恐らく一丁程度と考えられる。なお、『管見鈔』は『浄土真宗総合研究』一六(二〇二二年度内刊行)に翻刻を掲載する予定である。

- (10) 金沢文庫蔵書写本断簡(『目録番号』七五一六―一「甲」・二「乙」)。本書は、撰者未定の「阿弥陀経抄」として伝わっていたが、能島覚氏によって、甲乙二本が乙→甲の順番で接続する一連のものであり、長西門下の道教の「法事讚見聞集」下巻に推定できるとの見解が提示されている(『称名寺聖教「阿弥陀経抄」について』、『金沢文庫研究』三三三、二〇〇九年)。

- (11) 金沢文庫蔵書写本(『目録番号』九三一―一〇二)。撰者の入阿について、塚本善隆博士は鎮西義の敬蓮社入西(二〇三―二二八五)との見解を示す(『金沢文庫所蔵浄土宗学上の未伝稀観の鎌倉古鈔本』、『浄土学』(復刻版)二、一九八〇年、初出は一九三三年)。しかし、坪井俊映博士は内容面より諸行本願義に属する空寂説を提示する(『金沢文庫蔵観経疏頌意抄著者入阿について』、『金沢文庫研究』六四、一九五八年)。如上、諸説あるが、筆者は九品寺流の空寂と比定できる可能性のある点を見出すことができた。この点は、二〇二二年度中刊行(予定)の『佛教學研究』七九(龍谷大學佛教學會編)に論攷を掲載予定である。

- (12) 本表は、『管見鈔』の残存箇所を基準とし、他の三書においても『管見鈔』残存箇所に該当する範囲の内典に限定して算出したものである。なお、掲載順に特段の法則はないことを断っておく。

- (13) 『見聞集』の所引文献と引用回数については能島氏の論攷に纏められているが(四頁参照)、今回の註釈範囲に応じて筆者が再度算出した。

- (14) 同文を有する『四分比丘尼鈔』の可能性もある。

- (15) 智円の『選択集私聚鈔』四(京都府長講堂所蔵万延元年書写本、四・二丁右―左)にも同様の逸話が伝えられる。

(16) 筆者はかつて、長西教学の検討を通して「諸行本願義」という教義は一定でなく、複数の系統があることを間接的に論じたことがある。詳しくは前掲拙稿(二〇一六年)を参照されたい。

(17) 「又極樂衆生壽命无量故可名アミタ歎答不可名歎但迦才釈爾也」(「疑芥」三・一六丁左)、「又七礼并随意者何等歎答七礼在下随意者奉納歎」(「疑芥」四・一八丁右)など。

(18) なお、空寂については、称名寺聖教「観経疏頭意抄」(空寂撰)に、専雜二修理解など長西と一致する点のあることが指摘されており(坪井俊映「金沢文庫藏観経疏頭意抄の著者入阿について」、『金沢文庫研究』六四、一九六一年)、さらに多角的な検討を要する。今後の課題としたい。

(19) 以下に挙げる例②に、「述云」の後に「解曰」という文段が見られることから、「述曰」が何かしらの典籍に依拠する文段、「解曰」が論述する文段という構成である可能性も考えられる。しかし、①「述曰」すべてが特定の典籍に依拠しているわけではない、②前掲二書を「靈芝疏云」「慈恩云」などと断って引用する例が見られる、③撰号に「沙門尊空述」とある、という三点に鑑みて、「管見鈔」における「述曰」は、あくまでも自説の体裁で認めたものと考ええる。

(20) 全体を見た時に、微妙に文言を変えている箇所もある。その変更が単なる写誤であるのか、あるいは意図的な改変であるのかなど、細かい点は検討を要する。

(21) 「要略記」において「元照疏」が自説の如く用いられることについては、小論の註(11)に挙げた「佛教学研究」七九に掲載予定の論攷に現時点での試見を提示したので、参照されたい。

(22) 尊空撰述と推定される「選択集述疑」は、主張こそ諸行本願義であるが、本願観などで長西・道教と異なる思想を有し、必ずしも一致しないことが指摘される(浅井成海「金沢文庫の浄土教資料―特に『選択集述疑』を中心として」、『金沢文庫研究』二七三、一九八四年)。今回の考察結果は、「選択集述疑」の撰者を検討する上でも、重要な咨嗟を与えるものと考ええる。詳細な検討は今後の課題としたい。

(23) 空寂にも同様の著述態度が見られることを考えると、空寂は良遍(一一九四―一二五二)が住した生駒竹林寺に良遍よりも先に住していたことが伝えられるから(「浄土法門源流章」、『大正蔵』八四・二〇一頁上―中)、南都仏教の影響という面からも検討を要する。この点も今後の課題である。

(24) 称名寺聖教を視座とすることで、すでに従来は知られていなかった人師問あるいは流派間における影響関係等が明らかとなってきた。今後、中世浄土教を研究するにあたっては、未翻刻だからといって称名寺聖教を等閑

に付すのではなく、積極的に用いて全体を捉え直していかねばならないことを共有させていた。きたい。

付記

小論は、公益財団法人三菱財団の第四八回（二〇一九年度）人文科学研究助成による成果の一部である。